01 雪と氷の造形展
SNOW ART, SAPPORO

会期：第1回　1988年2月14日～2月21日（雪と氷の造形展 '88）
　　第2回　1989年2月12日～2月19日（雪の造形展 '89）
　　第3回　1992年2月 9 日～2月16日（雪の造形展 '92）

会場：札幌芸術の森 園内

主催：財団法人札幌芸術の森（現・公益財団法人札幌市芸術文化財団）

内容： 札幌市内・近郊の彫刻家などに雪や氷を素材とした作品の制作を依頼し、園内に約1週間展示した。北海道内の雪まつりなどに多くみられる、有名建築物の精巧な再現やアニメ等のキャラクター像とは異なる、美術家による造形性を求めた作品が、冬ならではの新たな表現を生み出した。
雪による彫刻としての完成度を競うフィンランドやカナダの雪像コンクールをヒントに始められ、札幌芸術の森の広大な敷地や雪国ならの特性を活かした新たな美術展としての可能性を示したが、経費等の問題から3回で中断している。しかし、雪像の造形性を求める動きは、さっぽろ雪まつりで1974年から続く「国際雪像コンクール」にみられるほか、「なよろ国際雪像彫刻大会ジャパンカップ」（2001年～ ）や「さっぽろ雪像彫刻展」（本郷新記念札幌彫刻美術館、2010年～）などに受け継がれている。

特徴： それぞれの美術家が自らの造形作品として、抽象や半具象の雪像を制作。雪や氷を用いているため短い期間しか形をとどめないが、積む、削る、付けるなどの作業が容易にできることにより、木や石や粘土など他の素材では実現しづらかった巨大な作品を可能にした。また、雪を黒くしたり、既存の建造物との関係性をもたせたり、池に張った氷を用いるなど、これまでの雪まつりの雪像とは明らかに異なるアプローチで新たな表現を模索する実験的な試みも多くみられた。

参加作家：
第1回　阿部典英、小石巧、多田紘一、永野光一、松井茂樹、松隈康夫、丸山隆、山下嘉昭、渡辺信（9作家）
第2回　阿部典英、越後耕司、熊谷文秀、小石巧、多田紘一、谷口丞、永野光一、松井茂樹、松隈康夫、松本純一、丸山隆、山下嘉昭、渡辺信、北海道造形デザイン専門学校（13作家、1学校）
第3回　阿部典英、熊谷文秀、清水郁太郎、菅原尚俊、永野光一、松井茂樹、札幌市立高等専門学校、北海道教育大学札幌分校彫塑研究室、北海道造形デザイン専門学校（6作家、3学校）

阿部典英《クロ・シロ・クロ（冬神の祭壇）》1988年（第1回）
雪に黒鉛の粉を混ぜ、氷を挟んだ3層の作品。雪=白という概念を覆すとともに、太陽光で溶けていく過程も作品に取り入れている。

松井茂樹《SNOW RIVER》1988年（第1回）
野外美術館入口の石垣のアーチ状開口部から幾筋もの管状の流れが生み出ていく、既存建造物を活かしたダイナミックな作品。

熊谷文秀《いけのこおり》1989年（第2回）
園内の池に張った氷を切り、その場に自立させた作品。切り出された穴と氷の立像の列が、意外性のある新たな風景を生んだ。

丸山隆《内部空間》1989年（第2回）［制作中］
石彫を手がける作者が抱いていた、人が入れるほどの建築的なスケールをもった作品をつくりたいという願望が雪を素材にすることによって実現した。